



長野県林業総合センタ - 塩尻市片丘 5739
Nagano-prefectural Forestry Research Center

TEL 0263-52-0600

FAX 0263-51-1311

アレチウリの防除

キ-ワ-ド:アレチウリ、生態、防除

河川敷や農耕地で大繁殖をして河川の植生や農作物に被害を与えるアレチウリが造林地に侵入し、造林木に巻き付いているという情報が入ってきました。そこでアレチウリの研究を進めている畜産試験場の原拓夫草地飼料部長にお話を伺いながら、アレチウリの生態と防除についてとりまとめました。

アレチウリとは

アレチウリ (*Sicyos angulatus* L.) は、北アメリカ原産のウリ科アレチウリ属の1年生ツル植物です。3～5稜のハート型をした手のひらサイズの大きな葉が特徴で、ツルには毛が変化した先端がカギ状になった細かくて白いトゲが密生しています。ツルからは3～4本に分かれた巻きひげを出して、他の植物に絡みつきます。

一年間で数m程度にまで成長しますが、時には10m近くの長さになることもあります。



いつ頃やって来たのか

アレチウリは、アメリカ産の大豆に混じって日本に侵入したと考えられており、長野県には1970年以前にすでに入ってきていました。最初の頃は、諏訪湖畔や長野市の千曲川でわずかに確認できる程度でしたが、大型で成長が早いことから1970年代に分布域を大きく拡大し、1980年には松本平でも容易に確認できるまでになりました。その後も急速に分布範囲を広げていて、現在では全県下の河川敷や原野、荒れ地などで大繁殖をしています。

アレチウリの生態

アレチウリは5月中旬に発芽し始めます。最初は側枝を発達させるだけであまり成長しませんが、7月から急激に伸び一気に5～6mに達します。その後8月上旬頃から開花し始め、開花から10日ほどで結実します。一年生草本ですので冬には枯れてしましますが、大量の種子を土中に残すと翌年も大発生し、次第に勢力を拡大していきます。

また、一度発生したアレチウリがなんらかの原因で消えても、土の中に眠っていた種子が目覚まし、20日くらいで再び発芽してきます。アレチウリが蔓延した畑には2,000粒/m²の種が落ちていますが、最初に発芽してくるのはこのうちの300粒程度に過ぎません。アレチウリの発芽率は70%程度ですから、条件がそろえば次々に発芽してきます。

しかし、アレチウリの種子は土の中での耐朽性が悪く、しばらく置いておくと皮が剥離し、中身が腐ってしまうようですので、何年間も種子が眠っているということはないようです。



河川敷のニセアカシアに巻き付いたアレチウリ（松本市内の河川敷にて）

アレチウリの防除

一年生草本であるアレチウリの防除は、種子を作らせないことがポイントになります。種子をつけさせなければ、翌年の発生量は激減し、根絶することも可能です。

アレチウリは除草剤には比較的弱いことが示されていますが、造林木に被害を与えずにアレチウリに効くという薬剤はありません。効果的な防除法は「抜き取り」ですが、その時季が大変重要です。

これまでの調査で、本県の場合8月10日以降に発芽した個体は、開花結実しないという結果が出ています。また抜き取りをする場合には、花に集まる蜂や、ツルに密生したトゲに注意する必要があります。特に花が終わる頃にはツルに密生したトゲが外れやすくなり、トゲはカギ状となっているため、服につくととれないうえ、皮膚に刺さると化膿することがありやっかいです。

以上のことから、防除の適期は8月上中旬（梅雨明け～お盆頃）といえます。

アレチウリは成長が旺盛ですぐに一面をおおってしまうため、放置すれば怖い雑草ですが、適切な防除により根絶が可能です。

担当者 育林部 小山泰弘